

2024(令和6)年の わが国周辺の漁海況の特徴について

目次

要約ー2024年のポイント	1
1. わが国周辺の海況	4
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	8
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ・さば類・マアジ	12
(2)サンマ	13
(3)カツオ・ビンナガ	14
(4)スルメイカ・アカイカ	16
4. トピックス	19

2025年1月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約—2024年のポイント

● 総括

- ・黒潮大蛇行が継続して 7 年目となる中で、三陸～道東海域や日本海西部～中央部を中心に高めの水温が続いた。
- ・全国主要港における 2024 年の水揚量は、前年比 94%の 169 万トン、平均価格は前年比 97%の 248 円/kgであった。諸経費高騰や水揚量の減少などにより、2010 年以降で最も魚価が高かった前年並みの高値となった。
- ・日本近海の主要魚介類の水揚量の減少傾向が長引く中で、サンマは魚体が大きく、近年としては好漁となった。カツオは前年に続いて近年としては好漁だった。スルメイカの水揚量は過去最低だった前年をやや上回った。海洋熱波などの影響により太平洋側のマサバは不漁が続いたが、東シナ海・日本海側のさば類の水揚量は前年を上回った。マイワシの水揚量も太平洋側で前年を下回り、東シナ海・日本海側で上回った。水温の上昇傾向に伴い、マイワシなど主要魚種で分布の北上や南下時期の遅れが引き続き見られたが、太平洋側のマイワシは例年より早い 12 月に好漁が見られた。

● わが国周辺の海況

- ・わが国周辺の海面水温は、三陸～道東海域や日本海西部～中央部を中心に近年(2011～2020 年平均)より高めで推移した。特に、三陸～道東海域では、黒潮続流の北偏や暖水渦の影響で、著しく高い海洋熱波の状態が続いた。
- ・黒潮大蛇行は今期も継続して 7 年目となり、観測史上最長を更新中である。
- ・黒潮域は、海面水温が近年より高めの海域が多く、特に夏季以降は気温が高く日射量も多かった影響で、高めの海域が拡大した。
- ・親潮の勢力は、期間を通して平年(1993～2017 年の平均)より弱めの状態が続いた。
- ・黒潮続流は三陸沖まで北上して北偏が続いたが、5 月に北上部が切り離されて暖水渦を形成して一時的に南下した。夏季終盤には再び三陸沖まで北上したが、12 月後半に常磐沖で北上部が切り離され、巨大な暖水渦を形成した。
- ・対馬暖流の勢力は期間を通しておおむね平年より強めで、流路は隠岐諸島西沖を北上し、大和堆南沖を通過して北日本では沖合を通過することが多かった。このため、大和堆を含む日本海中央部の海面水温は近年より高めとなることが多かった。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・JAFIC が調査している全国主要 117 港における 2024 年の調査対象全魚種の累計水揚量は、前年比 94%の 169 万トン、平均価格は前年比 97%の 248 円/kgであった。
- ・魚種別の水揚量と平均価格の関係について前年と比較した結果、マアジやブリなどで水揚量・価格ともに前年をやや下回った。
- ・価格は前年を下回る魚種が多かったが、全体としては 2010 年以降で最も高値であった前年並みで推移しており、依然として魚価高の状況が続いている。

● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における水揚量が 2010 年代から増加する中で、本年は 57.6 万トン(太平洋側 48.1 万トン、東シナ海・日本海側 9.5 万トン)となり、前年(60.1 万トン)を約 3 万トン下回った。
- ・太平洋側では道東のまき網が 20.6 万トンを漁獲し、前年の 25.1 万トンを下回った。
- ・日本海側では 12 月末までに約 5.3 万トンが境港に水揚げされたほか、隠岐海峡周辺で 9 月中旬～下旬に 0 歳魚が一時的に漁獲された。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における水揚量は近年のピーク(2018 年の 50.1 万トン)から減少し、本年は 21.0 万トン(太平洋側 6.4 万トン、東シナ海・日本海側 14.6 万トン)となり、不漁だった前年(21.2 万トン)を更に下回り、近年では最も少なかった。
- ・太平洋側では、海洋熱波などの影響により 2021 年から不漁が続いており、11 月に一時的にまき網によるまとまった漁獲がみられたものの、12 月末までに魚群の本格的南下は見られていない。
- ・本年の東シナ海・日本海側の水揚量は 14.6 万トンで前年(12.6 万トン)を上回った。

● マアジ

- ・マアジの全国主要港における水揚量は近年のピーク(2015 年の 11.8 万トン)から減少し、本年は 6.1 万トン(太平洋側 0.8 万トン、東シナ海・日本海側 5.3 万トン)となり、前年(6.5 万トン)をやや下回った。
- ・日本海側では、8 月ごろから隠岐海峡周辺で漁場が形成されたが、例年盛漁期である 2～5 月における境港の水揚量は前年を下回った。
- ・東シナ海側では、3～4 月は九州西沖海域、5～6 月には中南部海域を中心に漁獲が続いたものの、1～12 月の累計水揚量は前年を下回った。

● サンマ

- ・サンマの水揚量が近年のピーク(2014 年の 22.6 万トン)から減少する中で、今期の水揚量(3.7 万トン)は前年(2.3 万トン)を上回ったが、1969 年以降 5 番目に低かった。
- ・漁場は、漁期前半の公海漁場は前年よりも日本に近かったものの、日本 EEZ への魚群の来遊時期は前年より遅かった。また、前年に漁場が形成されたオホーツク海では漁場が形成されなかった。
- ・魚体は漁期を通して前年より体重 80g 未満の個体の混じりが少なく、平均単価は前年を上回った。

● カツオ

- ・全国の釣りによる生鮮カツオの近年の水揚量は変動が大きいですが、本年は 3.7 万トンとなり、前年(3.4 万トン)の 1.1 倍、過去 4 年平均(3.0 万トン)の 1.2 倍であった。
- ・6 月下旬～7月に、この時期としては珍しい脂の乗りが良いカツオが大量に水揚げされた。
- ・八戸～道東沖の暖水渦の周辺で漁場が持続したほか、高水温の影響で、11 月も漁場が持続し、12 月に入っても一部の船が操業を続けた。
- ・まき網による生鮮カツオの水揚量も近年は変動が大きいですが、本年は 1.2 万トンで、前年(1.3 万トン)の 93%、過去 4 年平均(1.2 万トン)並だった。

● ビンナガ

- ・全国の生鮮ビンナガの水揚量も近年は変動が大きいですが、本年は 1.6 万トンで、好漁だった前年(2.4 万トン)の 65%、過去 4 年平均(2.3 万トン)の 64%であった。
- ・6 月下旬に、八戸沖の暖水渦の中に漁場が形成され、例年と比べて北に漁場が形成された。

● スルメイカ

- ・全国主要港における生鮮スルメイカの水揚量が近年のピーク(2011 年の 12.8 万トン)から急減する中で、本年は 1.3 万トンで、前年の 1.2 万トンをやや上回った。価格はおおむね前年並みの高水準で推移し、12 月には 1,125 円/kg を付けた。
- ・海域別には、青森太平洋側(昼釣り・底曳網主体)、三陸(底曳網主体)、日本海が比較的好調だった。
- ・冷凍スルメイカの水揚量も 2011 年のピーク(4.1 万トン)から急減する中で、本年は 1.1 千トンで、前年(1.8 千トン)を大きく下回った。価格は 12 月に過去最高の 2,033 円/kg を付けた。

● アカイカ

- ・北太平洋沖合域でのアカイカ夏漁は 9 月中旬で終了した。本年の夏漁の水揚量は 3.9 千トンで、前年(2.8 千トン)の 1.4 倍、過去 4 年平均(4.1 千トン)の 94%であった。
- ・本年の平均価格は 701 円/kg で、前年(961 円/kg)の 73%であった。
- ・夏漁の資源水準を表す 1 日 1 隻当たり漁獲量(CPUE: 胴肉ケース数/日・隻)は、2020 年をピークに減少傾向にあったが、本年は増加に転じて前年の 1.6 倍になった。

1. わが国周辺の海況

(1) 季節別海況概要

黒潮大蛇行は2024年も継続して7年目に突入し、観測史上最長を更新中である。海面水温は、三陸～道東海域や日本海西部～中央部を中心に年間を通して近年(2011～2020年の10年平均)より高めの状態が続き、三陸～道東海域では過去20年(2004～2023年)の最高を更新した。

(1) 冬季(1～3月)

1) 黒潮域

黒潮流路は、小蛇行の発達により、九州～四国沖で変動が大きかった。

・黒潮流路

黒潮流路(図1-1)は、九州～四国沖で小蛇行が発達しながら東進したため変動が大きく、一時的に離岸することもあった。流路の変動は下流側に伝播し、潮岬沖と伊豆諸島付近で蛇行するW字型流路となった。伊豆諸島付近の蛇行は3月下旬に発達して八丈島南東沖まで南下した。

・海面水温

四国海域(図1-2①)の海面水温は、おおむね近年より高め(図5-①)であった。遠州灘～熊野灘(東海)海域(図1-2②)の海面水温は、遠州灘沖の黒潮屈曲部から暖水が波及し、おおむね近年より高めであった(図5-②)。しかし、3月は黒潮流路がW字型流路をとった影響により石廊崎沖で一時的に黒潮が離岸したため、近年より低めの時期がみられた。伊豆諸島南部(図1-③)の海面水温は黒潮が通過し、おおむね近年より高めで推移した。

沖縄東沖～本州南方沖(図1-2B)や関東南東沖(図1-A)の海面水温は、風や日射量が少なかった影響で近年より低め海域もみられた。

2) 親潮域・混合域

黒潮続流は北偏が続いたが、3月に北上部が切り離された。親潮第一分枝の南端は、おおむね襟裳岬付近に停滞した。

・黒潮続流

黒潮続流(図1-1)は、岸側の最北上部(峰)が前年に引き続き三陸沖の40°N付近まで著しく北偏した。鹿島灘沖では3月に北上部が一時的に切り離されて、巨大な暖水塊を形成した。

・親潮

親潮の面積(100m深で5°C以下)は、前年に引き続き平年(1993～2017年の平均)より小さい～かなり小さい状態が続いた。第一分枝の南端は襟裳岬沖付近に停滞し、第二分枝は暖水に覆われ不明瞭であることが多かった。

・海面水温

三陸沖海域(図1-2④)と三陸沿岸海域(図1-2⑦)

の海面水温は、近年より著しく高い状態が続いた。特に三陸沖海域では1月には近年最高の+7.3°C、2月には+7.2°C(図5-2④)を記録した。道東海域(図1-2⑤)の海面水温は、黒潮続流の北偏や黒潮系暖水波及の影響で近年より高めの状態が続いた。常磐海域(図1-2C)の海面水温は、黒潮続流が通過した影響で、おおむね近年より高めであった。道東はるか沖(図1-2D)の海面水温も、暖水波及の影響で、近年より高めであることが多かった。

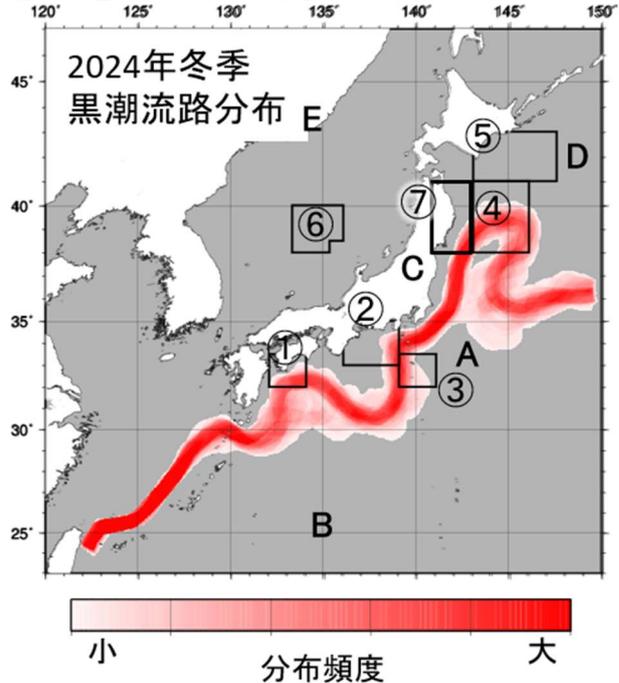


図1-1. 2024年冬季(1～3月)の黒潮流路分布(海上保安庁海洋情報部の海流GISデータを使用) 黒枠①～⑦は図5の①～⑦の海域に対応

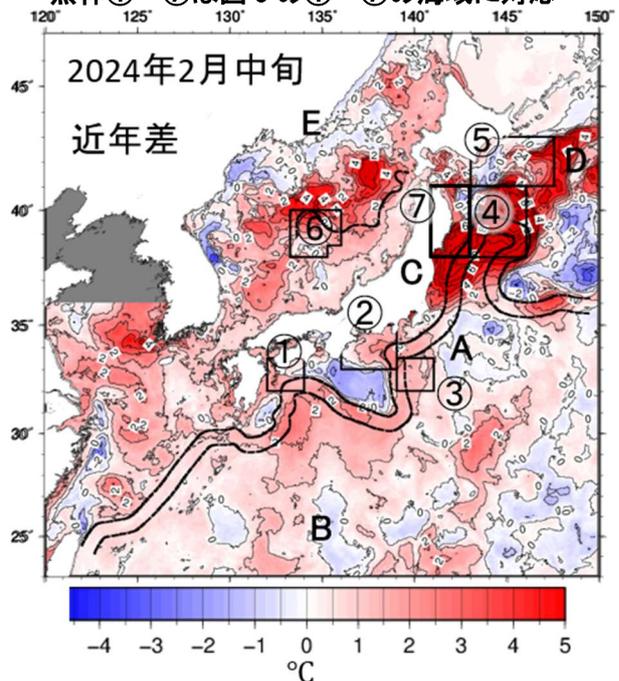


図1-2. 2024年2月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

3)日本海

対馬暖流の勢力は強く、海面水温はおおむね近年より高めであった。

・対馬暖流

対馬暖流の勢力は、前年に引き続き平年よりかなり強めであったが、後半は弱まる傾向であった。対馬暖流の流路(図 1-1)は、冬季前半は、山陰沖では離岸して大和堆付近を通過し、東北沖でも離岸して沖合を流れる流路であったが、能登半島沖で一時的に南下した。

・海面水温

海面水温は、対馬暖流が離岸した影響で、沖合には近年より3~4℃高めの海域が広がり、大和堆海域(図 1-2⑥)の近年差も+2℃前後で推移した。

(2) 春季(4~6月)

1) 黒潮域

黒潮流路は、小蛇行の東進により、潮岬~伊豆諸島付近で変動が大きかった。

・黒潮流路

黒潮流路(図 2-1)は、4月までは四国沖で離岸してW字型流路が続き、伊豆諸島付近の蛇行は八丈島以南まで南下していたが、5月はこの蛇行が冷水渦として切り離された。これに伴い遠州灘沖の屈曲部が消滅し、伊豆諸島付近ではほぼ直線的に北東進する流路をとり、三宅島~八丈島付近を通過することが多かった。6月は九州南東沖で再び小蛇行が発達し始め、遠州灘沖では屈曲部が復活して大島~三宅島付近を通過した。

・海面水温

四国海域(図 2-2①)の海面水温は、おおむね高めであったが4月は黒潮流軸が離岸した影響で、やや低めの時期もみられた。遠州灘~熊野灘(東海)海域(図 2-2②)の海面水温は、春季はおおむね近年より高めであったが、5月に一時的に遠州灘沖の黒潮屈曲部が消滅して暖水波及が弱まったため、近年より低めの時期がみられた。

沖縄東沖~本州南方沖(図 2-2B)や関東南東沖(図 2-2A)の海面水温は、おおむね近年より高めであった。

2) 親潮域・混合域

黒潮続流は、北上部の切離と再結合を繰り返した。親潮第一分枝の南端は襟裳岬以東に後退した。

・黒潮続流

黒潮続流(図 1-2)は、鹿島灘沖で3月に切り離された巨大な暖水塊が4月に黒潮続流と再結合し、黒潮続流は再び三陸沖の40°N付近まで北偏した。5月には仙台湾沖で黒潮続流北上部が切り離されて暖水渦を形成し、黒潮続流は常磐沖まで南下して北偏は解消した。切り離された暖水渦は徐々に北東進した。

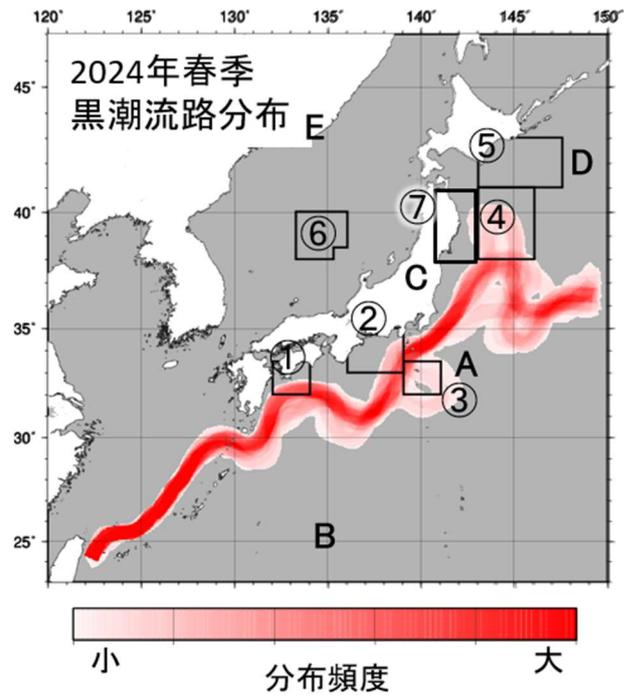


図 2-1. 2024 年春季(4~6月)の黒潮流路分布

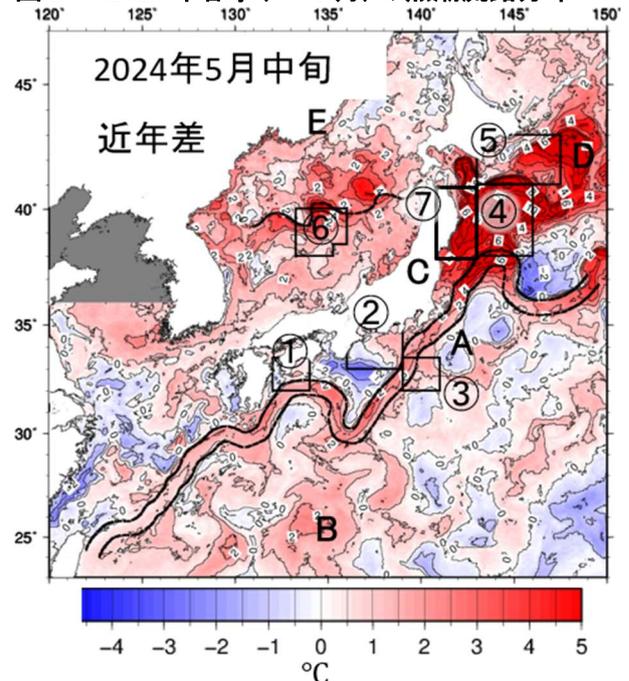


図 2-2. 2024 年 5 月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

・親潮

親潮の面積は平年よりかなり小さい状態が続いた。親潮第一分枝の南端は襟裳岬沖から根室沖付近に後退し、第二分枝は暖水に覆われ不明瞭であることが多かった。

・海面水温

三陸沖海域(図 2-2④)と三陸沿岸海域(図 2-2⑦)の海面水温は、近年より著しく高い状態が続いた。特に5月の三陸沖海域では、近年差が近年最高の+7.3℃を記録した。道東海域(図 2-2⑤)の海面

水温は、黒潮続流の北偏や黒潮系暖水の影響で春期前半は近年より高めの状態が続き、2024年4月中旬に近年差は近年最高の+4.2°C(図5-⑤)を記録した。

春季後半は、黒潮続流北上部が切り離されて暖水渦が形成され、道東沖まで北上した。この暖水渦の時計回りの流れに沖合の親潮系冷水が引き込まれて三陸に接岸したため、三陸沖海域(図2-2④)と三陸沿岸海域(図2-2⑦)の水温の正偏差は大幅に縮小した(図5)。一方、道東海域(図2-2⑤)の水温偏差は、暖水渦北上の影響で近年最高の+4.2°Cを記録した。

常磐海域(図2-2C)の海面水温は、黒潮続流が通過し、おおむね近年より高めであった。道東はるか沖(図2-2D)の海面水温も、暖水波及の影響で、近年より高めの傾向であった。

3)日本海

対馬暖流の勢力は徐々に回復し、海面水温はおおむね近年より高めであった。

・対馬暖流

対馬暖流の勢力は、4~5月上旬は平年より弱め~かなり弱めになったが、6月はかなり強めに回復した。対馬暖流は4~5月は冬季に引き続いて大和堆付近を通過して沖合を流れたが、6月は南下して接岸傾向になった。

・海面水温

大和堆海域(図2-2⑥)の海面水温は、4~5月上旬は対馬暖流が通過していたため、2~3°C高めであった。一方、5月下旬以降は対馬暖流の勢力は復活し始めたが、大和堆以南を通過するようになったため、大和堆海域の水温の近年差は縮小した。

(3)夏季(7~9月)

1)黒潮域

黒潮は、九州沖で一時的に小蛇行が発達した。

・黒潮流路

黒潮流路(図3-1)は、九州沖で小蛇行が一時的に発達して離岸したが、四国以東には伝搬せず、潮岬~伊豆諸島西沖では安定した。伊豆諸島付近では、黒潮はおおむね三宅島付近を通過した。

・海面水温

四国海域(図3-2①)や遠州灘~熊野灘(東海)海域(図3-2②)の海面水温は、気温が高く日射量も多かった影響もあり、近年より高めの状態が続いた。伊豆諸島南部(図2-2③)の海面水温は、台風通過により一時的に近年より低めになったが、おおむね高めで推移した。

沖縄東沖~本州南方沖(図3-2B)や関東南東沖(図3-2A)の海面水温は、台風通過により一時的に近年より低めになることもあったが、気温が高く日射量も多かった影響で、近年よりおおむね高めであった。

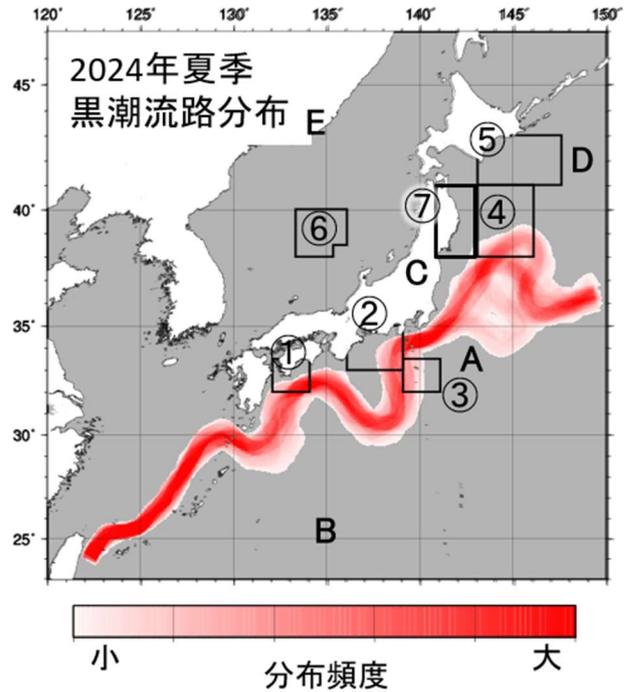


図3-1. 2024年夏季(7~9月)の黒潮流路分布

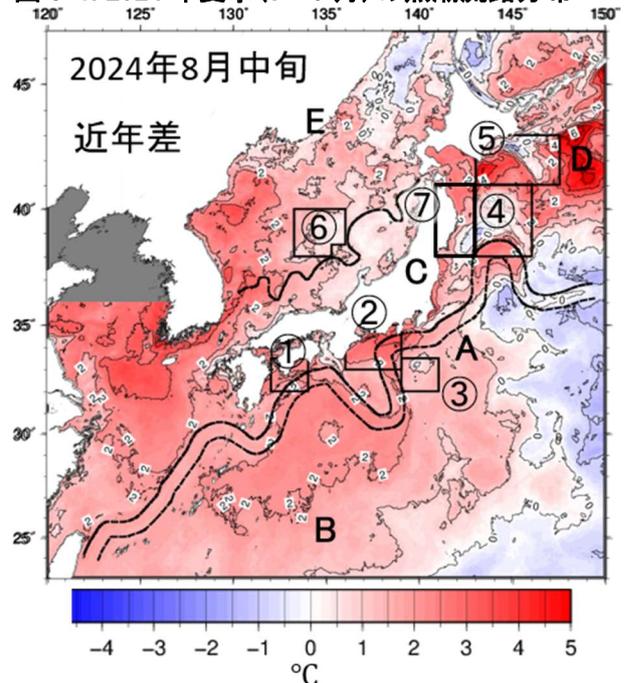


図3-2. 2024年8月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

2)親潮域・混合域

黒潮続流は再び北偏し、常磐では一時的に離岸した。親潮第一分枝南端は根室半島付近に停滞した。

・黒潮続流

黒潮続流は(図3-1)は徐々に北上し始め、9月以降は39°N付近まで北偏が進んだ。一方、房総半島沖では7~8月に冷水渦と結合して常磐では一時的に離岸したが、9月以降は接岸傾向であった。

・親潮

親潮の面積は、引き続き平年よりかなり小さい状

態が続いたが、後半やや拡大した。親潮第一分枝の南端は根室沖付近に停滞し、第二分枝は暖水に覆われ不明瞭であったが、道東沖暖水渦の東側を徐々に南下し始めた。

・海面水温

三陸沖海域(図 2-2④)と三陸沿岸海域(図 2-2⑦)の海面水温は、道東沖暖水渦の時計回りの流れに沖合の親潮系冷水が引き込まれて接岸した影響で、6月に引き続き近年差が縮小した。しかし、9月は黒潮続流が再び北偏し始めたため、三陸沖海域と三陸沿岸海域の近年差は拡大傾向であった。道東海域(図 2-2⑤)の海面水温は、期間を通じて暖水渦の時計回りの流れに親潮系冷水が引き込まれて流入し、近年差は急速に縮小した。

道東はるか沖(図 1-2D)の海面水温は、暖水波及の影響で、期間を通して近年より高めの傾向にあった。

3)日本海

対馬暖流の勢力は徐々に弱まったが、海面水温はおおむね近年より高めであった。

・対馬暖流

対馬暖流の勢力は、前半は平年より強めであったが、後半は勢力が弱まり平年並み~弱めであった。対馬暖流は山陰西部沖で蛇行して南下した後、大和堆の南を通過し、能登半島沖で南下したが、東北沖では離岸していた。

・海面水温

海面水温は、おおむね近年より高めであった。特に夏季后半は、対馬暖流の勢力が弱まったにもかかわらず、気温が高く日射量も多かった影響で大和堆海域(図 3-2⑥)の近年差は拡大した(図 5-⑥)。また、朝鮮半島沖は東朝鮮暖流の勢力が強かった影響で、近年差が拡大した。

(4)秋季(10~12月)

1)黒潮域

黒潮はおおむね安定した状態が続いた。

・黒潮流路

黒潮流路(図 4-1)は安定していたが、四国沖では12月にやや離岸した。また、潮岬~伊豆諸島付近では10月に蛇行最南部が31°N付近まで北上した。しかし、11月以降には再び30°N付近まで南下した。

・海面水温

四国海域(図 4-2①)、遠州灘~熊野灘(東海)海域(図 4-2②)、伊豆諸島南部(図 4-2③)の海面水温は、前半は気温が高く日射量も多かった影響で近年より高めの状態が続いたが、後半は気温が平年並みになり、12月には近年差も縮小した。

沖縄東沖~本州南方沖(図 4-2B)や関東南東沖(図 4-2A)の海面水温は引き続き近年より高めであったが、12月は風や日射量が少なかった影響で近年差は縮小した。

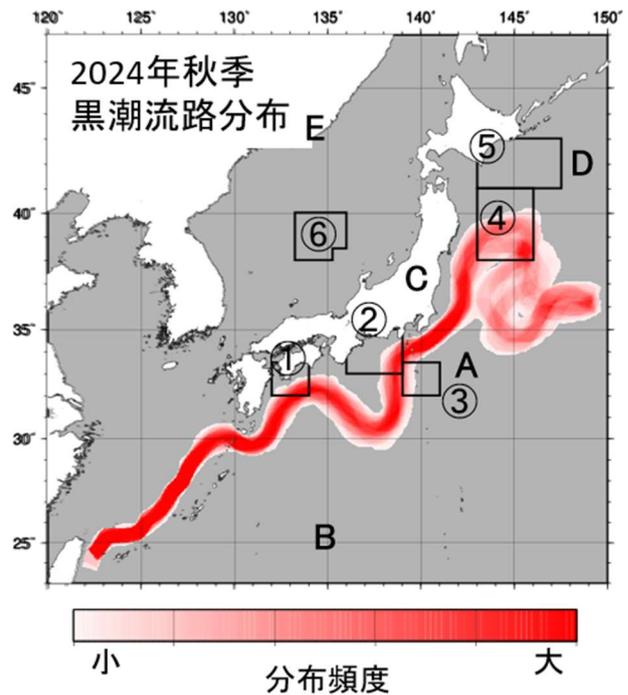


図 4-1. 2024 年秋季(10~12 月)の黒潮流路分布

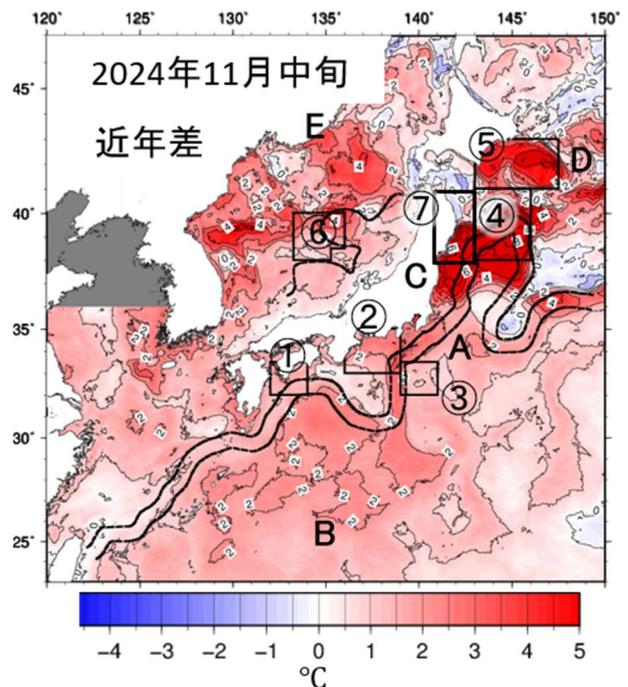


図 4-2. 2024 年 11 月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

2)親潮域・混合域

黒潮続流は北偏が続いたが、12月に北上部が切り離された。親潮第一分枝は不明瞭であった。

・黒潮続流

黒潮続流(図 4-1)は、常磐~三陸南部で接岸しながら 39~40°N 付近まで北偏した。しかし、12月下旬に黒潮続流北上部が常磐沖で切り離されて巨大暖水渦を形成した。この暖水渦は1月現在も切り

離されたままである。

・親潮

親潮の面積は、夏季後半に一時的に拡大したが縮小し、平年よりかなり小さい状態が続いた。親潮第一分枝の南端は、道東沖暖水渦が接岸した影響で不明瞭であった。親潮第二分枝は道東沖の暖水渦の東側を引き続き南下した。

・海面水温

三陸沖海域(図 4-2④)と三陸沿岸海域(図 4-2⑦)の海面水温は、黒潮続流が再び北偏したため近年差が拡大した(図 5-④)。道東海域(図 4-2⑤)の海面水温は、前半は暖水渦が接岸した影響で近年差が拡大した。しかし、後半は暖水渦が徐々に東進して離岸し、近年差は縮小傾向であった。

常磐海域(図 2-2C)の海面水温は、黒潮続流が接岸したため、おおむね近年より高めであった。道東はるか沖(図 4-2D)の海面水温は、暖水波及の影響で、期間を通して近年より高めの傾向であった。

3) 日本海

対馬暖流の勢力は強めで、海面水温は沖合や朝鮮半島沖を中心に近年より高めであった。

・対馬暖流

対馬暖流の勢力は、おおむね平年より強めであった。対馬暖流(図 4-1)は山陰西部で蛇行して南下した後、大和堆～能登半島沖で接岸し、東北沖で離岸した。

・海面水温

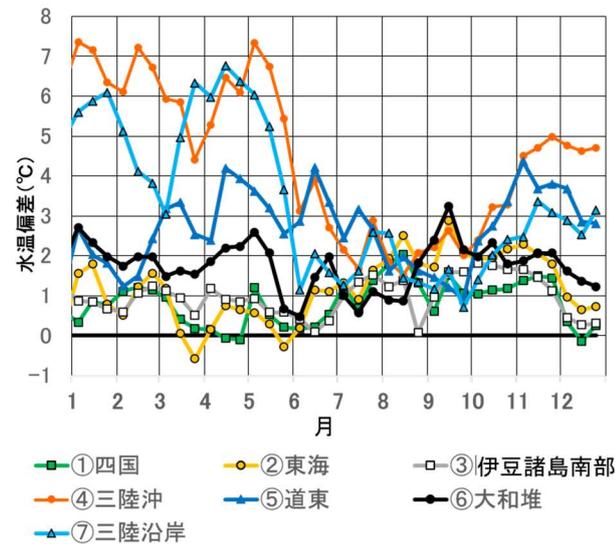


図 5. 2024 年における海域毎の海面水温の近年差の推移 海域①～⑦の位置は図 1 を参照

大和堆海域(図 4-2⑥)の海面水温は、対馬暖流蛇行部に冷水が南下したため、徐々に近年差が縮

小した(図 5-⑥)。一方、東北沖では対馬暖流が離岸した影響で近年より高めの状態が続いた。朝鮮半島沖の海面水温は、東朝鮮暖流の勢力が強かった影響で近年差が拡大した。

(海洋事業部 矢野泰隆)

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

(1) 主要港における主要魚種の動向

JAFIC が調査している全国主要 117 港における 2024 年の調査対象全魚種の累計水揚量は 169 万トンで、2023 年(179 万トン)の 94%と前年をやや下回り(表 1)、調査を開始した 2010 年以降で最低水準であった。平均価格は 248 円/kg で、2023 年(255 円/kg)の 97%と前年並み(増減率 5%以下)で、2010 年以降で最高価格だった前年に次ぐ高値であった。なお、本報告の水揚量と価格は、JAFIC「おさかなひろば」によるものであり、2024 年 12 月は速報値である。

表 1. JAFIC 調査港の 2024 年の月別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年との比較

月	2024年		2023年		前年対比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
1	115,505	253	125,652	252	92%	100%
2	111,438	231	132,521	224	84%	103%
3	115,324	226	171,505	196	67%	115%
4	163,502	190	128,891	232	127%	82%
5	118,726	237	155,227	258	76%	92%
6	184,605	205	178,610	230	103%	89%
7	174,781	185	182,643	195	96%	95%
8	110,963	263	97,614	286	114%	92%
9	183,499	284	190,700	284	96%	100%
10	186,164	357	238,506	277	78%	129%
11	114,289	334	96,673	359	118%	93%
12	106,755	204	95,697	345	112%	59%
合計	1,685,552	248	1,794,238	255	94%	97%

(2) 主要 49 魚種の水揚量と平均価格

主要 49 魚種の 2024 年の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年と比較した(表 2、図 6)。

水揚量は、カタクチイワシ、サンマ、生鮮スルメイカなど 13 魚種が前年を上回り、さば類、生鮮カツオ、クロマグロなど 11 魚種は前年並み、マイワシ、マアジ、アキサケなど 25 魚種は前年を下回った。平均価格は、ホッケ、サンマ、キンメダイなど 10 魚種が前年を上回り、マダラ、ビンナガ、冷凍メバチなど 13 魚種は前年並み、スケトウダラ、冷凍カツオ、冷凍ミナミマグロなど 10 魚種は前年を下回った。

以上のように、2024 年は、前年よりも水揚量や価格が前年をやや下回る魚種が多かった。全般的には、水揚量の増減にあわせて価格が反対方向に変化する傾向にあった。しかし、前年が高値だったこともあり、ウルメイワシやイセエビなど「水揚量が減少したにもかかわらず、価格が下落した魚種」も目立った。一方で、サンマは水揚量が増加したにもかかわらず、価格が上昇した。

(3)産地市場における代表魚種の月別動向

水揚量・価格ともに前年をやや下回ったブリと上回ったサンマについて動向を検討した。

1)ブリ

2024 年の累計水揚量は 2.9 万トンで前年(3.8 万トン)の 78%であった。平均価格は 292 円/kg で前年(310 円/kg)の 94%であった。月別にみると、水揚量は前年同月を下回る月が多かった(図 7)。1~2 月の価格は、水揚量が少なかったこともあり、前年および過去 5 年平均を大きく上回ったが、その後は水揚量の増加に伴って下落し、5 月は前年並みとなった。6 月以降は、おおむね水揚量の多寡に応じて価格が変動した。

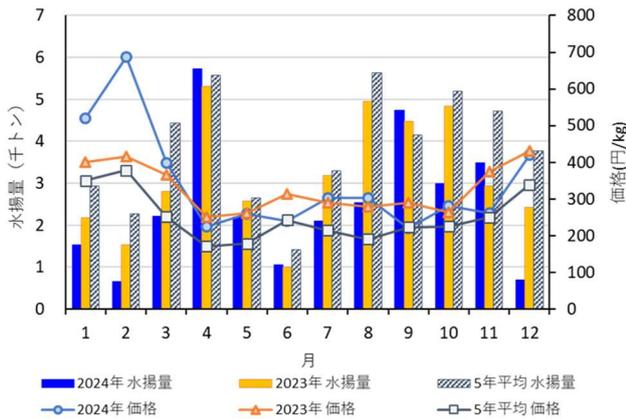


図 7. ブリの水揚量と価格の推移

2)サンマ

2024 年の累計水揚量は 3.7 万トンで前年(2.2 万トン)の 165%であった。平均価格は 462 円/kg で前年(420 円/kg)の 110%であった。今期のサンマ棒受網漁は、前年までと異なり、漁船のトン数階層に関係なく 8 月 10 日に解禁にされ、8~11 月の水揚量は 11 月までは前年を上回って推移し、12 月は前年を下回った(図 8)。水揚量が前年を上回ったものの、価格は大きく落ち込むことはなかった。この原因として、前年よりも小型魚の混じりが少なかったこと、末端の需要が多かったことが考えられる。

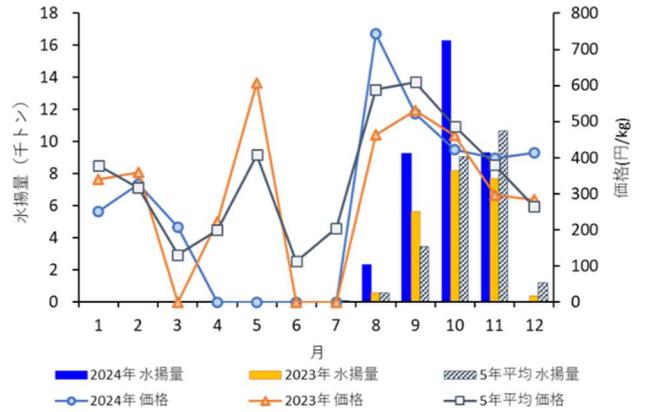


図 8. サンマの水揚量と価格の推移

表 2. JAFIC 調査港における 2024 年の魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年との比較(2023 年の平均価格の昇順に並べ、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。)

	2024年		2023年		前年比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
スケトウダラ	78,548	52	77,070	64	102%	81%
マイワシ	576,012	70	610,039	71	94%	99%
カタクチイワシ	13,099	81	9,211	92	142%	88%
ウルメイワシ	37,107	86	52,342	100	71%	86%
ニシン	6,090	95	4,465	102	136%	93%
ホッケ	14,055	156	17,766	112	79%	139%
さば類	211,523	137	212,231	138	100%	99%
ほたてがし殻付	59,736	195	63,235	204	94%	96%
マダラ	30,037	244	31,175	253	96%	96%
マアジ	61,563	249	65,666	277	94%	90%
ブリ	29,917	292	38,197	310	78%	94%
冷カツオ	172,104	254	148,912	315	116%	81%
かれい類	9,544	283	9,306	324	103%	87%
生カツオ	52,739	334	51,376	386	103%	86%
サンマ	37,219	462	22,521	420	165%	110%
ビンナガ	15,662	438	24,109	457	65%	96%
冷キハダ	26,401	425	36,448	475	72%	89%
さわら類	1,858	688	2,416	689	77%	100%
アキサケ	44,234	1,025	52,651	697	84%	147%
マダイ(天然)	3,430	674	3,333	737	103%	91%
ギンザケ(養殖)	8,535	814	12,117	746	70%	109%
ヤリイカ	2,701	824	3,839	754	70%	109%
マカジキ	545	690	508	809	107%	85%
冷メバチ	16,292	848	18,121	862	90%	98%
生キハダ	8,447	934	9,605	910	88%	103%
ヒラマサ	896	714	720	912	124%	78%
生スルメイカ	12,996	818	11,608	932	112%	88%
サザエ	249	1,081	336	968	74%	112%
ヒラメ(天然)	1,660	924	1,638	1,021	101%	91%
マダイ(養殖)	196	1,123	191	1,091	103%	103%
生メバチ	4,546	1,082	5,385	1,111	84%	97%
たこ類	6,243	1,023	5,238	1,129	119%	91%
メジマダコ(ヨコワ)	495	970	491	1,132	101%	86%
ハマチ(養殖)	591	1,042	123	1,224	482%	85%
メカジキ	2,453	1,220	2,674	1,250	92%	98%
あなご類	642	1,073	571	1,290	112%	83%
冷スルメイカ	1,124	1,730	1,796	1,625	63%	106%
キンメダイ	1,643	1,927	2,221	1,747	74%	110%
冷ミナミマグロ	4,840	1,635	5,273	1,954	92%	84%
ヒラメ(養殖)	20	2,073	19	2,068	106%	100%
アカムツ(ノドグロ)	214	2,756	271	2,099	79%	131%
あまだい類	175	3,148	193	2,633	91%	120%
クロマグロ	3,759	2,671	3,857	2,744	97%	97%
キンキ(キチジ)	669	2,619	626	2,819	107%	93%
クルマエビ	21	4,453	23	4,795	89%	93%
トラフグ	187	4,124	143	4,836	131%	85%
イセエビ	124	5,260	158	6,431	79%	82%
あわび類	25	8,586	32	9,671	78%	89%
うに類(剥き身)	66	12,797	63	14,887	105%	86%

(4) 東京都中央卸売市場における動向

東京都中央卸売市場の水産物の取扱数量と平均価格を表3に示した。2024年(1~11月)の累計取扱数量は28.2万トンで、前年同期(27.8万トン)の101%であった。平均価格は1,484円/kgで高値だった前年同期(1,458円/kg)の102%であった。月別にみると、数量は11月を除き、前年同月並み、価格は年間を通じて前年同月並みで推移した。

表3. 東京都中央卸売市場の2024年の月別取扱数量(トン)と平均価格(円/kg)および前年との比較

月	2024年		2023年		前年対比	
	数量	価格	数量	価格	数量	価格
1	21,510	1,529	22,010	1,497	98%	102%
2	23,860	1,488	23,159	1,446	103%	103%
3	26,700	1,477	26,994	1,448	99%	102%
4	28,133	1,402	26,885	1,380	105%	102%
5	25,924	1,440	26,118	1,427	99%	101%
6	25,950	1,441	27,289	1,404	95%	103%
7	25,517	1,552	24,719	1,491	103%	104%
8	23,949	1,547	23,154	1,512	103%	102%
9	25,363	1,461	24,602	1,466	103%	100%
10	27,801	1,477	27,417	1,446	101%	102%
11	28,087	1,532	26,315	1,540	107%	100%
合計	282,794	1,484	278,662	1,458	101%	102%

(出典:東京都中央卸売市場 市場統計情報)

次に、前項で産地市場における動向を比較した、ブリとサンマについて、東京都中央卸売市場における動向を検討した。

1) 生鮮ブリ

2024年の累計取扱数量は1.7万トンで前年(1.8万トン)の97%、平均価格は533円/kgで前年(508円/kg)の105%であった。月別にみると、数量、価格ともにおおむね前年と同様の傾向で推移したものの、1~5月は前年および過去5年平均を上回る高価格であった(図9)。

2) 生鮮サンマ

2024年の累計取扱数量は3,300トンで前年(1,800トン)の178%、平均価格は1,033円/kgで前年(1,300円/kg)の79%であった。サンマ棒受網漁が前年よりも好漁だったことから、数量は8月以降、前年を大きく上回り、数量の増加に伴って価格は下落した(図10)。月別にみると、8月は需要の強さもあり、前年を上回り、9月は前年並みで推移した。しかし、10~11月は、前年に比べ生鮮向けサイズの水揚げが多かったことから前年を下回って推移した。

(5) まとめ

2024年は、産地市場では2023年と比較すると、水揚げ量が減少した魚種が多かった。また、平均価格は前年が高値だったこともあり、前年を下回る魚種

が多かった。一方で、全体の価格は2010年以降で最も高値だった前年並みであった。

また、東京都中央卸売市場では、年間を通じて数量、価格ともにおおむね前年並みで推移したものの、消費地市場においても高値の状況は変わっておらず、円安による輸入水産物価格の上昇や燃油をはじめとする資材価格の高騰などの影響が示唆される。

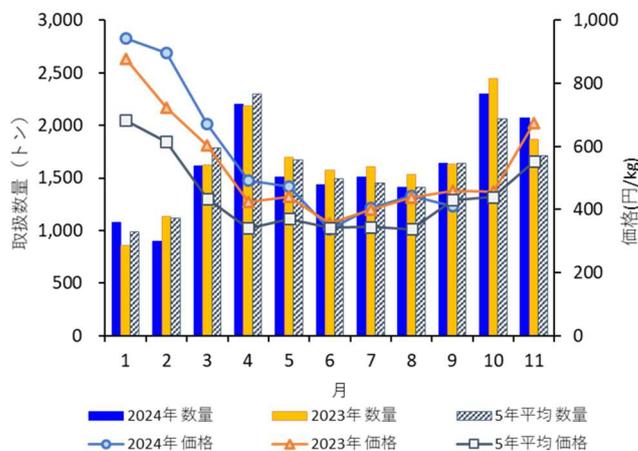


図9. 生鮮ブリの取扱数量と価格の推移

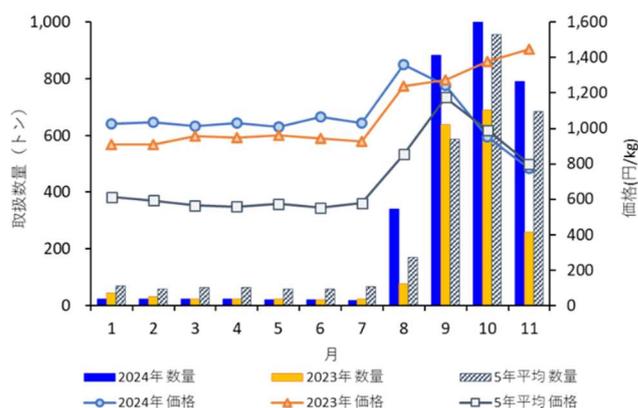


図10. 生鮮サンマの取扱数量と価格の推移

一方、家計調査結果(総務省統計局)によると、全国の2人以上世帯の1世帯当たりの生鮮魚介類の購入数量は、2024年1~11月の累計で前年同期の99%、購入金額を購入数量で割った平均価格も前年同期の99%であった。生鮮魚介類の購入量が前年並みとなった中で、サンマの増加(前年同期比173%)が目立った。

以上のように、産地市場と消費地市場において、依然として魚価高の状況が継続しているものの、前年からの価格の上昇は落ち着いており、末端の消費量は回復傾向にある。特に、サンマは前年よりも漁模様が好調だったこともあり、生鮮魚介類の購入量の回復を後押ししたとみられる。

(水産情報部 石山なな子)

3. 魚種別の漁海況・市況

(1) マイワシ・さば類・マアジ

● マイワシ

マイワシの全国主要港における 2024 年の水揚量は 57.6 万トン(太平洋側 48.1 万トン、東シナ海・日本海側 9.5 万トン)で、前年同期(61.0 万トン、太平洋側 53.3 万トン、東シナ海・日本海側 7.7 万トン)を約 3 万トン下回った(図 11)。道東沖では 6~10 月にまき網船が 20.6 万トンを漁獲したが、前年の 25.1 万トンを下回った。太平洋側のまき網では、1~6 月は体長 14~18cm(1~3 歳魚)主体に好漁で、20cm 以上(4 歳魚以上)も混じった。12 月は例年になく、まき網でのまとまった漁獲があり、体長 15~16cm(1, 2 歳魚)を中心に好漁であった。日本海側の体長は 3~5 月は 15~17cm 前後(1 歳魚)主体、9 月中旬には 11~14cm(0 歳魚)主体となり、9 月下旬以降は 0 歳魚に 15~16cm の 1 歳魚が混じった。価格は、世界的なフィッシュミール価格の動向や国内での加工向け需要の増加などを反映し、1~7 月は前年並み~上回る高水準で経過した。8 月以降は、ペルーのカタクチワシが第一漁期(4~8 月)に 243 万トン漁獲された影響で(前年同期は禁漁)、前年を下回った(図 12)。マイワシ価格の変動についてはトピックスを参照されたい。

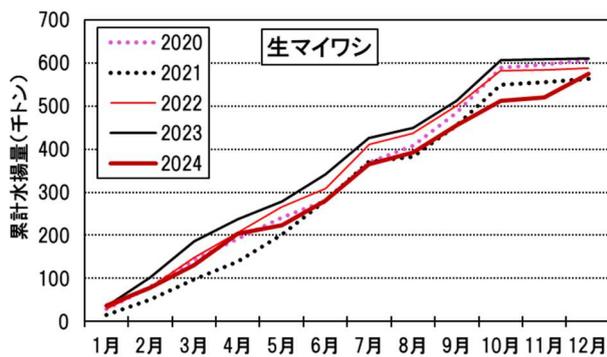


図 11. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

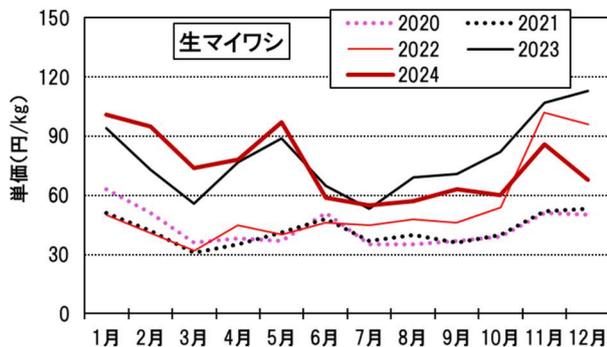


図 12. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における 2024 年の水揚量は 21.0 万トン(太平洋側 6.4 万トン、東シナ海・日本海側 14.6 万トン)で、不漁だった前年同期(21.2 万トン、太平洋側 8.6 万トン、東シナ海・日本海側 12.6 万トン)並みであった(図 13)。不漁は太平洋側で顕著で、水揚量は 2013 年以降で最も少なかった。太平洋側では、11 月には八戸沖~犬吠沖にまき網漁場が形成され、体長(尾叉長)30cm 以上の南下群とみられる魚が一時的に漁獲されたが、12 月現在で本格的な魚群の南下は見られていない。東シナ海・日本海側での水揚量は前年を上回り、太平洋側の 2 倍以上であった。2 月と 6 月の境港では過去 5 年平均を上回る水揚があり、南下期の大型まき網船の漁場は対馬海域で例年より早く 11 月から形成されたが、九州西沖ではまとまった漁獲がなかった。対馬海域での好漁についてはトピックスを参照されたい。価格は前年並みの高水準で推移し、12 月に入ると太平洋側での不漁が影響し、価格がさらに上昇した(図 14)。

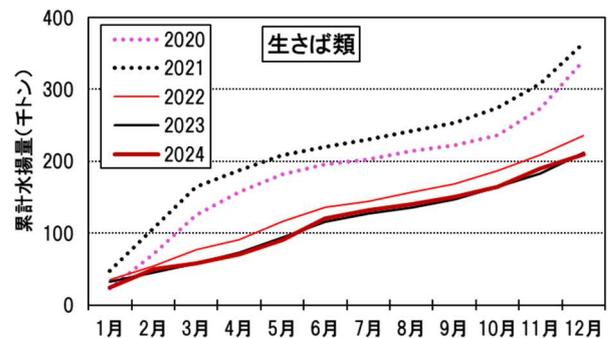


図 13. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

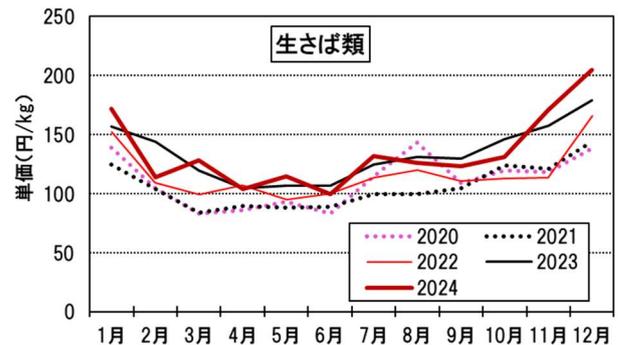


図 14. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

● マアジ

マアジの全国主要港における本年 12 月末現在の水揚量は 6.1 万トン(太平洋側 0.8 万トン、東シナ海・日本海側 5.3 万トン)で、前年同期(6.5 万トン、太平洋側 0.8 万トン、東シナ海・日本海側 5.7 万トン)を下回り、過去 5 年で最低であった(図 15)。日本海側で

は、8 月ごろから隠岐海峡周辺で漁獲が続き、境港における8月と12月の水揚量は前年を上回ったが、2～5月は前年を下回った。日本海側での1～12月の累計水揚量は前年並みであった。東シナ海では、3～4月は九州西沖海域、5～6月には中南部海域中心に漁獲が続いたものの、1～12月の累計水揚量は前年を下回った。価格は2月と7月では前年を上回ったが、それ以外の月は前年並み～下回った(図16)。

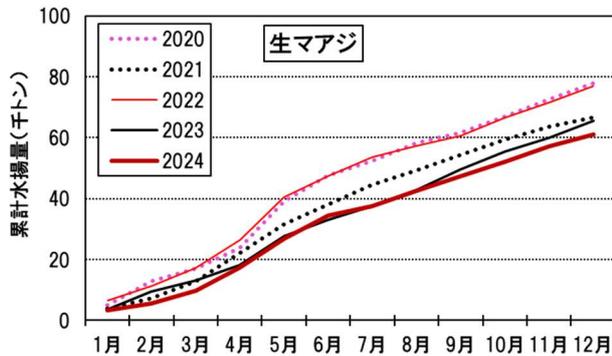


図 15. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

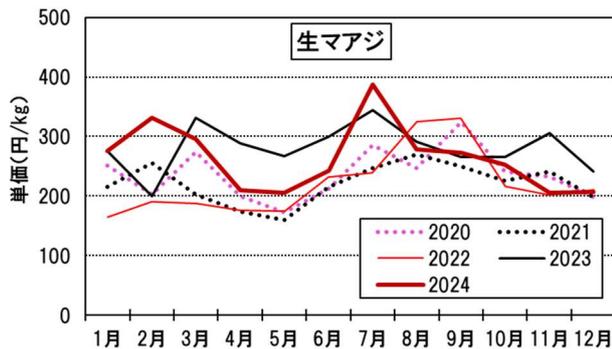


図 16. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移
(水産情報部 源 浩輔)

(2)サンマ

2024 年の水揚量は前年を上回って推移した(図23)。平均単価は9～10月は前年並み、他の月は上回って推移した(図17)。12月末までの累計水揚量は約3.8万トンであり、過去4年(2020年～2023年)を上回ったものの、1969年以降5番目に低く、最も水揚量が多かった2008年(約34.3万トン)の11%であった。累計水揚金額は過去4年(2020～2023年)を上回った。

2024年の漁況の経過は以下のとおりである(漁場は図19、漁獲物の組成は図20参照)。2024年は、8月10日に全船が解禁となった。なお、前年の業界申合せによる出漁解禁日は10トン以上20トン未満船が8月11日、20トン以上100トン未満船が8月15日、100トン以上の大型船が8月20日であった。

2024年はロシア主張EEZ内での操業開始が10月とされたことから、初期漁場は前年に引き続き公海となった。

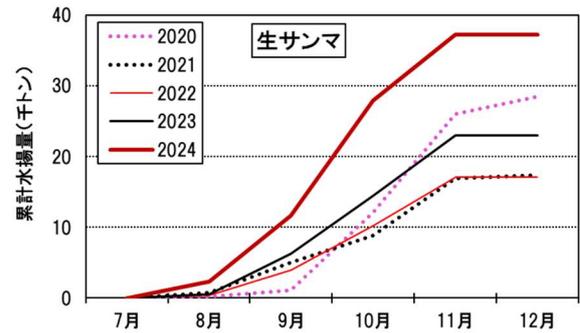


図 17. 生鮮サンマの2020～2024年の水揚量の推移

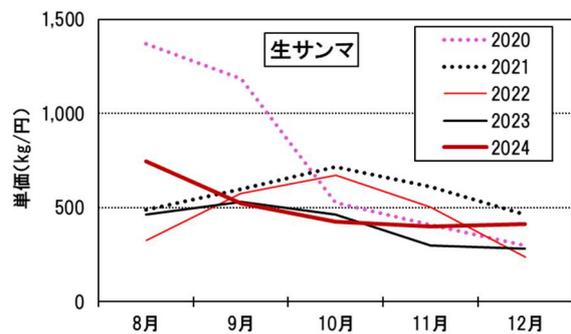


図 18. 生鮮サンマの2020～2024年の月別単価の推移

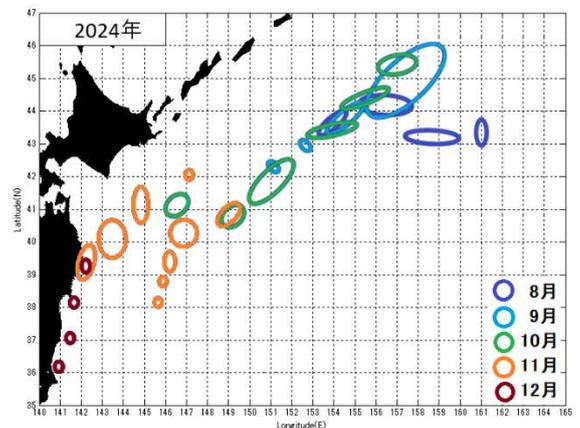


図 19. 2024年の月別サンマ主漁場

8月の主漁場は、根室市花咲港東800～1,200kmであった。漁場は、前年よりもやや西側であったが遠く、小型船の多くは出漁できなかった。漁獲物は体長27～29cmが主体、体重は90～110g台が主体であり、漁獲物によっては100～120g台が多く混じた。

9月の主漁場は、花咲港東450km～東北東1,100kmであった。漁獲物は、体長27～29cm台が主体、体重80～110g台が主体であり、前年と比べると、体長26cm以下、体重70g以下の個体が少な

った。

10月の主漁場は、花咲港南南東 190～350km～東北東 1000km であった。体長は 27～30cm 台が主体、体重は 80～120g 台が主体であった。

11月の主漁場は、女川東 20km ～宮古東 200km～襟裳岬東南東 150km～花咲港南南東 400km であった。漁獲物は、体長は 27～30cm 台が主体、体重は 90～120g 台が主体であった

12月上旬の主漁場は、金華山南東 30km～釜石東 20km、小名浜東北東 60km、那珂湊南東 20km であった。各漁場とも漁獲量が極めて少なく、12月2日夜で操業を切り上げる船が多かった。12月中旬まで一部の船が残ったものの、その後も時化が多く操業できない日が多く、漁獲無く、切り上げとなった。

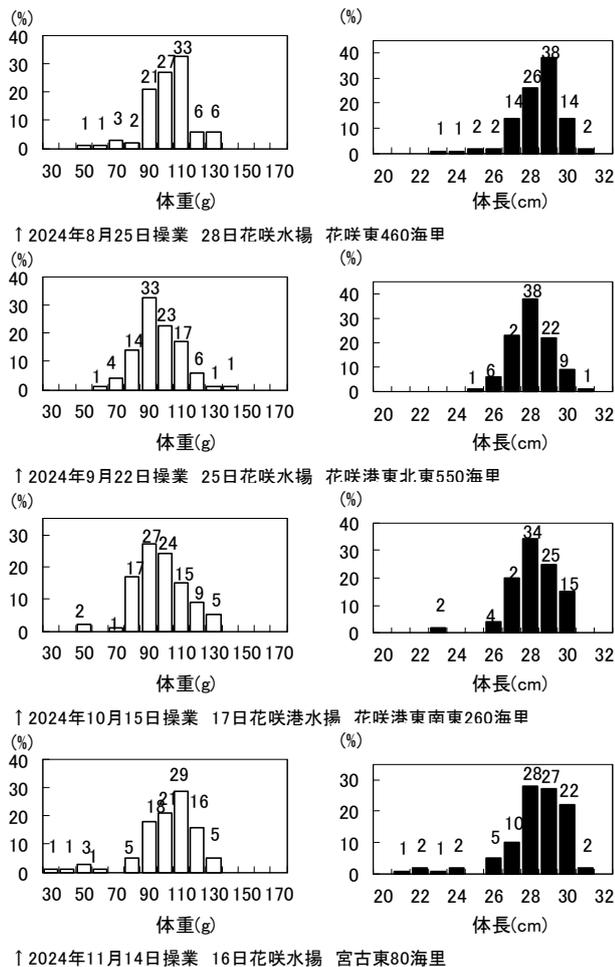


図 20. 2024年のサンマ体重組成と体長組成

水揚量が前年よりも増加した要因として、大型船の出漁が前年よりも10日間早まったこと、花咲港から片道1日半程度の漁場に前年よりもサンマの分布量が多かったことがある。国立研究開発法人水産研究・教育機構が今年6～7月に公海域で行ったトロール調査において、1区の東側(東経155度～163度)にサンマのまとまった分布が認められ、8～9月の主漁場となった。9月中旬から13～14℃台にも漁場が形成され漁獲がまとまるようになってきたことから、こ

の頃から1区の北に分布していたサンマが南下し、漁場に加わったと考えられる。

一方、2024年は日本EEZへの魚群の来遊時期が前年より遅くなった。この原因として、黒潮続流が三陸沖合まで張り出していたことに加え、道東海域に暖水塊が存在し、親潮の張り出しが非常に弱かったことから、道東海域～三陸海域にかけて前年よりも水温が高く、サンマの西への移動が妨げられた可能性がある。また、前年はオホーツク海で漁場が形成されたが、今年は漁場が形成されなかったことから、今年はおホーツク海への魚群の来遊が少なかったと思われる。

令和6年度サンマ長期漁海況予報では、漁期後半から0歳魚が多く混じるとされたが、2024年の水揚物の主体が漁期終盤まで体重80g以上であり、水揚物の多くが生鮮、加工、缶詰原料に利用できるサイズであった。このため、平均単価は前年を上回った(図18)。11月中旬に沖合を南下する親潮第2分枝沿いである大船渡東～金華山東沖の190～210海里に漁場が形成された。この漁場における漁獲量は三陸沿岸よりも多かったものの、魚体が小さかった。これらのことから、11月中旬以降に来遊した魚体が小さい群の多くは沖合を南下し、主な漁獲対象にはならなかったと考えられる。

水揚量が前年よりも増加したことに加え、平均単価が前年を上回ったことから、累積水揚金額は前年の1.7倍となり、大型船をはじめとして経営的に一息つける年になった。一方で、漁況予報に関しては、課題が残る年となった。

(水産情報部 渡邊一功)

(3)カツオ・ビンナガ

●カツオ

2024年の全国釣りによる生鮮カツオの水揚量は3.7万トンで、前年(3.4万トン)の1.1倍、過去4年平均(3.0万トン)の1.2倍であった(図21)。漁業者からの聞き取りによれば、春先は伊豆・小笠原列島を北上するカツオの群れが見えなかった。このため、例年この時期の主な水揚港である千葉県勝浦港への水揚げが少なく、東北沖への来遊も一時不安視されたが、6月以降の東北北部沖の好漁が持続したため、年間水揚量は比較的好調となった。

6月下旬～7月に、この時期としては異例ともいえる脂の乗りが良いカツオが八戸沖で大量に漁獲された。八戸沖の暖水渦に形成された漁場は餌が豊富であったこと、カツオの好適水温が表層に限られたために深淺移動が制限されたことから、脂のりが良かったと考えられる。この詳細は、「2024(令和6)年上半年期のわが国周辺の漁海況の特徴について」のトピックスを参照されたい。その後、八戸～道東沖の暖水渦周辺で、10月まで漁場が持続したほか、高水温の影響で11月でも東北北部海域の漁場が持続し、12月に入っても一部の船が操業を続けた(図22)。

10、11月に宮城県気仙沼港に水揚げされたカツオには、2~3kgのもの、4kg程度のものが見られた。それぞれ東北部沖合と仙台湾周辺で漁獲されており、漁場によって魚体サイズが異なった。仙台湾周辺漁場は黒潮続流が接岸したため海面水温23℃程度の高水温帯が岸近くに形成され、東北部沖合漁場の海面水温は18~20℃程度であった。このことは、低い水温ほど小型のカツオが分布するという既往知見と一致していた。本年は日本近海に体サイズの異なる複数の群れが来遊し、それぞれの群れの適水温帯に応じて漁場が形成されたと考えられる。

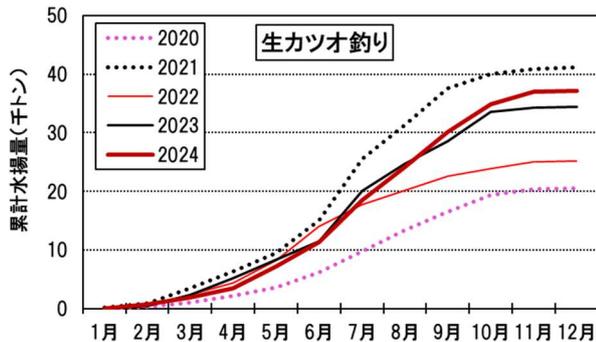


図 21. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣り)の月別累計水揚量の推移

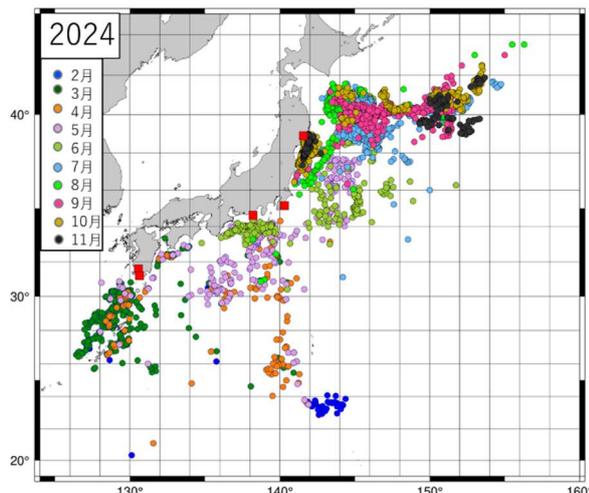


図 22. 2024 年 1~11 月の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体)※12月の漁場情報は無し

価格は4月までは水揚量が少なくやや高値だったが、その後は水揚量が安定し300円/kg前後で推移した(図23)。

まき網による生鮮カツオの水揚量は1.2万トンで、前年(1.3万トン)の93%、過去4年平均(1.2万トン)並だった(図24)。漁場は竿釣りとおおよそ同様で、6月以降から好調となった。価格は7月が比較的高く、約400円/kg、11月と12月は安く127~175円/kgで、それ以外の月は300円前後で推移した(図25)。

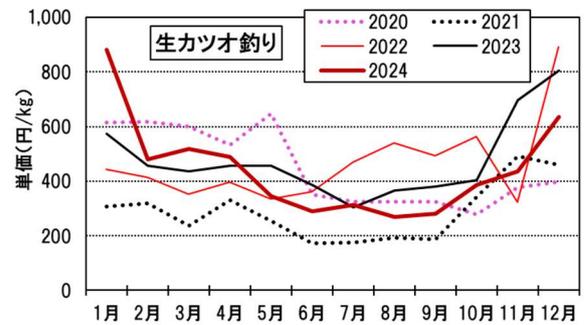


図 23. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣り)の月別単価の推移

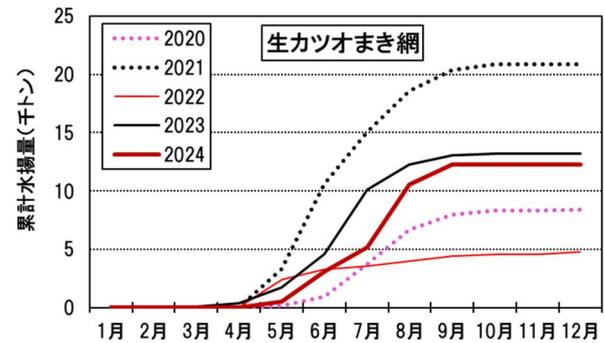


図 24. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

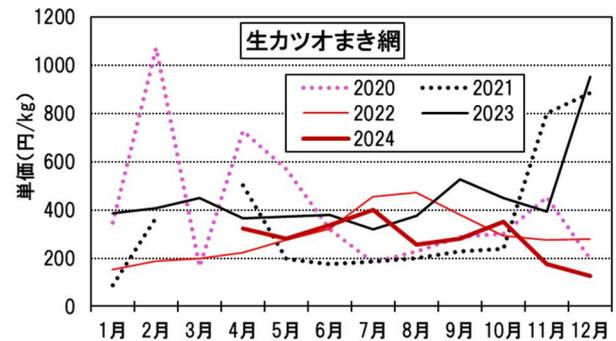


図 25. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

● ビンナガ

2024年の全国の生鮮ビンナガの水揚量は1.6万トンで、好漁だった前年(2.4万トン)の65%、過去4年平均(2.3万トン)の64%であった(図26)。6月下旬に、八戸沖の暖水渦の中に漁場が形成され、漁場は例年と比べて北よりであった。生鮮ビンナガの多くは、中型カツオ竿釣り船による水揚である。ビンナガの主漁期は6月で終了したため、本年の動向の詳細については「2024(令和6)年上半年期のわが国周辺の漁海況の特徴について」を参照されたい。価格は337~773円/kgで、おおむね前年および前々年を下回ったが、月別の変動傾向は近年と同様であった(図27)。

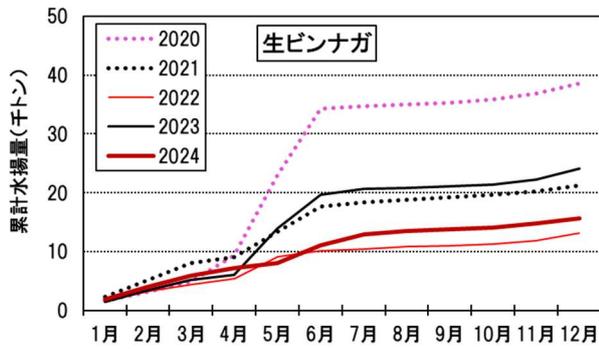


図 26. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

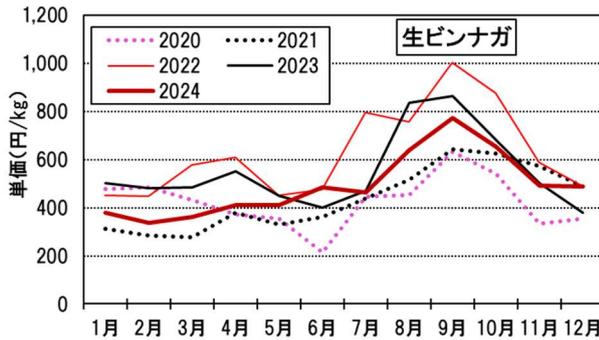


図 27. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

(4) スルメイカ・アカイカ

● 生鮮スルメイカ

本年の全国主要港における生鮮スルメイカの水揚量は 1.3 万トンと、前年の 1.2 万トンをやや上回ったものの、2020～2023 年平均(1.8 万トン)を大きく下回った。(図 28)。この不漁の主な原因は、秋季発生系群と冬季発生系群の資源量が減少したためと考えられる。

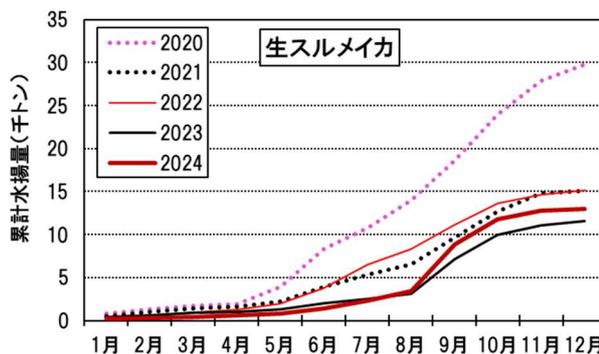


図 28. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

主な海域別の水揚量は、青森(昼釣り・底曳網主体)で前年比 116%、三陸(底曳網主体)で前年比 129%、日本海で 122%と前年をやや上回った(図 29)。青森の好漁の原因は不明であるが、三陸が好調だ

った原因として、太平洋スルメイカ長期漁海況予報によると常磐～三陸海域に分布する群が前年より多かったことが考えられる。一方、日本海では前年よりも多かったのは金沢で、他の海域では低調であった。単価は、1～6 月と 11～12 月は前年並み～上回って推移し、7～10 月は下回った(図 30)。

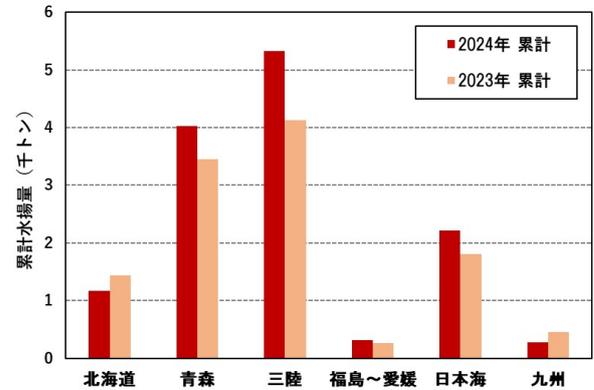


図 29. 2023 年と 2024 年の生鮮スルメイカの海域別水揚量

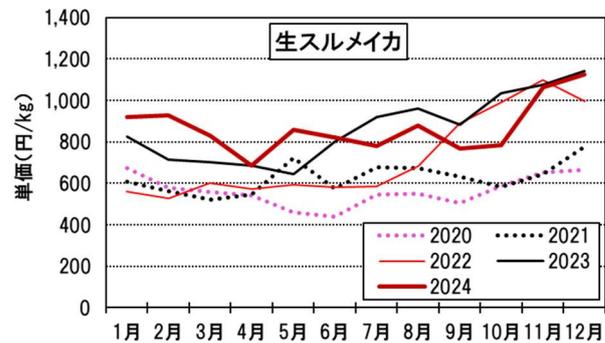


図 30. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

● 冷凍スルメイカ

本年の全国主要港における水揚量は 1.1 千トンで、2020～2023 年の平均 (4.7 千トン)および前年(1.8 千トン)を大きく下回った(図 31)。日本海の冷凍いか釣り船のスルメイカ漁は例年 6 月～翌年 2 月に操業する。例年漁場となる大和堆では 8 月までは魚群が見られず、9 月に漁場が形成されて以降も、1 日 1 隻当たりの漁獲量は 0.2～0.5 トンと低調に推移した。なお、前々年に好漁がみられた大和堆北方のロシア水域内には本年は入漁しなかった。

単価は、前年末以来の高値を維持して 1～3 月は 1,900 円/kg 台で推移した(図 32)。6～8 月は加工用となる小型サイズ主体となり、1,200 円/kg 前後に低下した。その後、刺身向けとなる IQF(一尾凍結品)主体の水揚があり、12 月には過去最高の 2,033 円/kg となった。今期は中国や韓国からの輸入が増える余地がなかったことも相場を押し上げた一因となった。このように価格は高水準で推移したが、水揚量

が少なかったことに加え、諸経費が高騰したことから、経営的には厳しい状況にある。

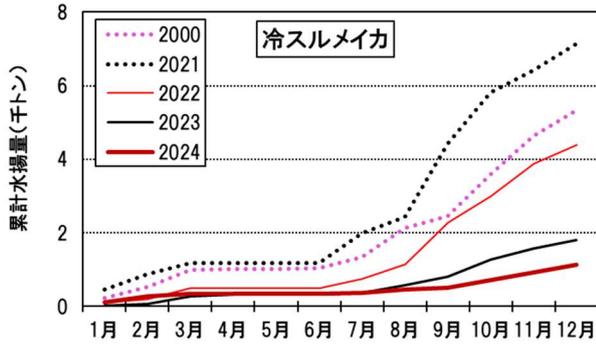


図 31. 2020～2024 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

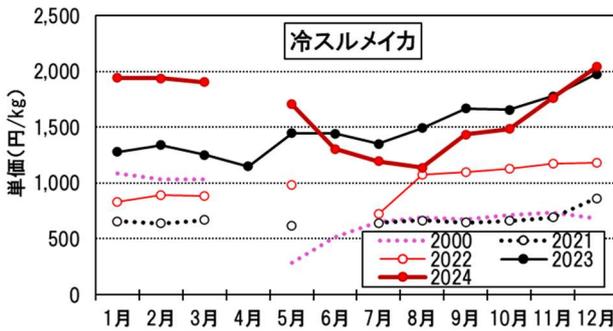


図 32. 2020～2024 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移
(水産情報部 緑川聡)

● アカイカ(ムラサキイカ)

本年のアカイカ夏漁(5～9月)の累計水揚量は3.9千トンで、前年(2.8千トン)の1.4倍、過去4年平均(4.1千トン)の94%であった(図33)。水揚は八戸主体であったが、函館にも485トンが水揚された。6月以降の価格は650～850円/kgで推移した(図34)。本年の平均価格は701円/kgで、前年(961円/kg)の73%であった。

本年の水揚量と平均価格との関係から計算される総水揚金額は、前年(27.1億円)並みの27.2億円と推計され、比較的高い水準であった(図35)。

北太平洋西経海域で5～9月(夏漁)に出漁した中型いか釣り船は24隻、大型いか釣り船は1隻で、前年同様であった(図36)。本年も日本海のスルメイカが不漁であることから、多くの船は9月中旬までアカイカ漁を続けた。また、北太平洋西経海域では約30隻の中国いか釣り船が操業していた。

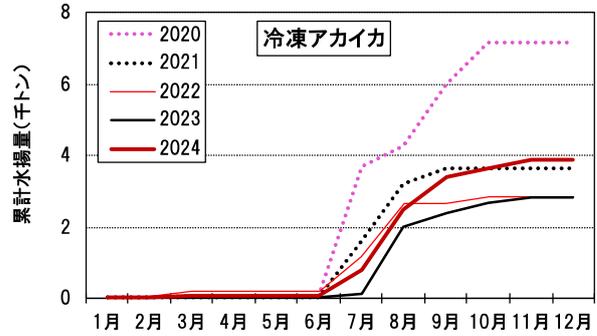


図 33. 冷凍アカイカの2020～2024年の累計水揚量

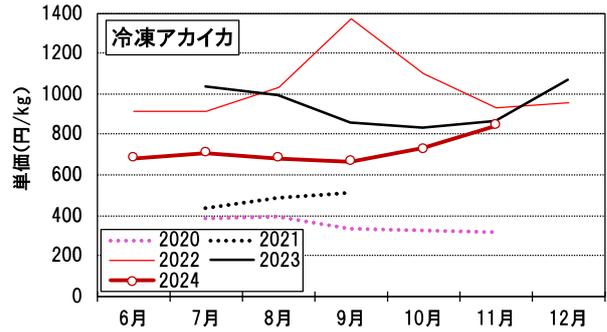


図 34. 冷凍アカイカの2020～2024年の月別価格の推移

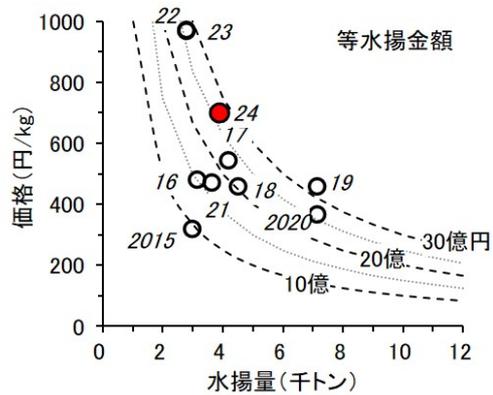


図 35. アカイカの2015～2024年の年別水揚量と価格(円/kg)の関係。破線は等水揚金額曲線

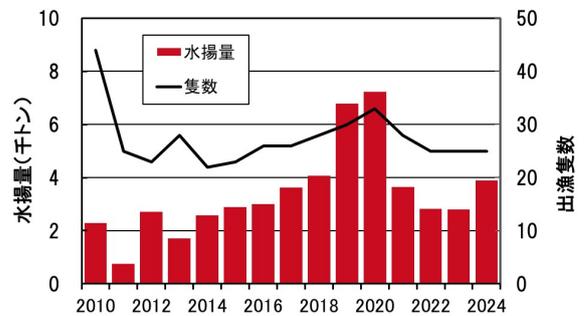


図 36. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁(5～9月)の水揚量と出漁隻数の推移

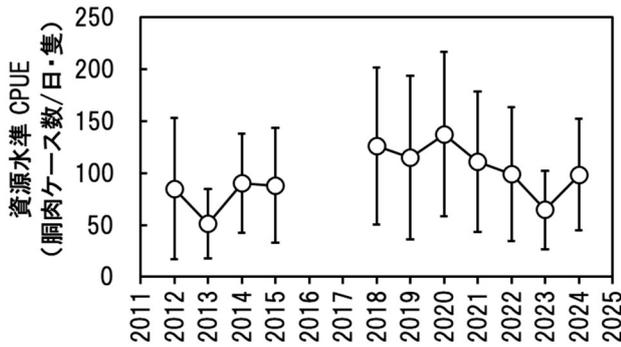


図 37. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁の胴肉ケース数でみた資源水準(ケース数/日・隻)の推移(○:平均値、|:標準偏差)。2016年と2017年はデータなし。

アカイカ夏漁の対象となる資源水準を表す1日1隻当たりの漁獲量(CPUE:胴肉ケース数/日・隻)は、2020年をピーク(137ケース/日・隻)に減少傾向にあった(図37)。しかし、本年のCPUEは増加に転じ、前年の1.6倍(99ケース/日・隻)になった。

近年、アカイカ夏漁の漁場は徐々に北方に形成されてきたが、本年はさらに北上した(図38)。これは北太平洋における近年の海洋熱波の影響によるものとみられる。

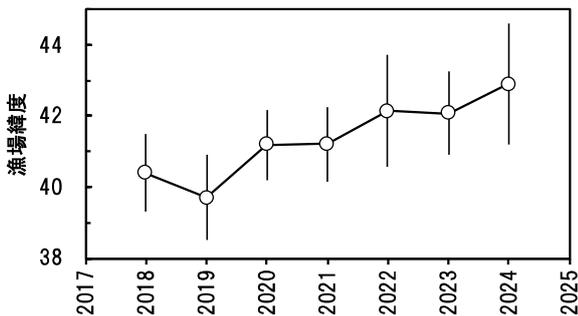


図 38. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁の中型いか釣り船の漁場緯度の推移(○:平均値、|:標準偏差)

(水産情報部 酒井光夫)

トピックス1 2024年の大型クラゲの出現

大型クラゲ（和名：エチゼンクラゲ、学名：*Nemopilema nomurai*）は、成長すると傘径が約2mにも達する世界最大級のクラゲである。発生源は主に中国沿岸海域や韓国沿岸海域と考えられており、2011年には日本・中国の共同調査において長江河口付近で幼生（エフィラ）が発見されている。一方、日本周辺海域での再生産は確認されておらず、日本周辺への出現は死滅回遊と考えられる。

日本周辺での大型クラゲの出現は、古くは1958年と1995年に確認されているが、2000年代に入って大量出現が頻発するようになった。この大量出現に応じて水産庁では被害防止のための調査、国内外の情報収集、データの解析、予測に加え、情報配信の事業、駆除等の事業を総合的な事業を展開している。大型クラゲによる漁業被害としては、漁業者などからのヒアリングによると、①同時に漁獲された魚の品質劣化、②作業負担の増大や健康被害、③漁具の破損、などが挙げられている。



図 39. 2024年の長崎県対馬の豆敷定置における大型クラゲの出現状況（撮影：中村祐喜）

2000年代以降の大型クラゲの出現の特徴は、それまでの単年ではなく、これまでにない大量出現が複数年にわたって続いたことなどである。特に2009年は史上最大の出現となり、九州沿岸、日本海沿岸、北海道沿岸、東北沿岸に加えて、関東・東海沿岸にまで出現し、漁業被害をもたらした。2010年以降、大型クラゲの出現は、短期的かつ散発的な出現が見られる年はあった。しかし、2024年に14年ぶりに大量出現が見られたため、その概要を紹介する。

図 39 は対馬の定置網での様子である。図 40 は2010年以降の大型クラゲの日本国内での出現個体数の累計量の推移の年比較である。2024年は、それまでの大量出現年に比して早期（6月末）から急激に出現が増えた。しかし、大量出現が2000年代初めのデータも含めて解析すると状況は変わってくる。

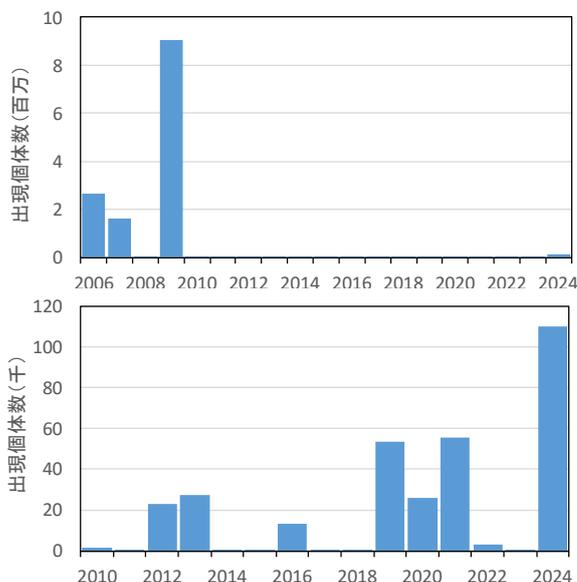


図 41. 大型クラゲの年別出現量の比較（上：2006～2024年、下：2010～2024年）

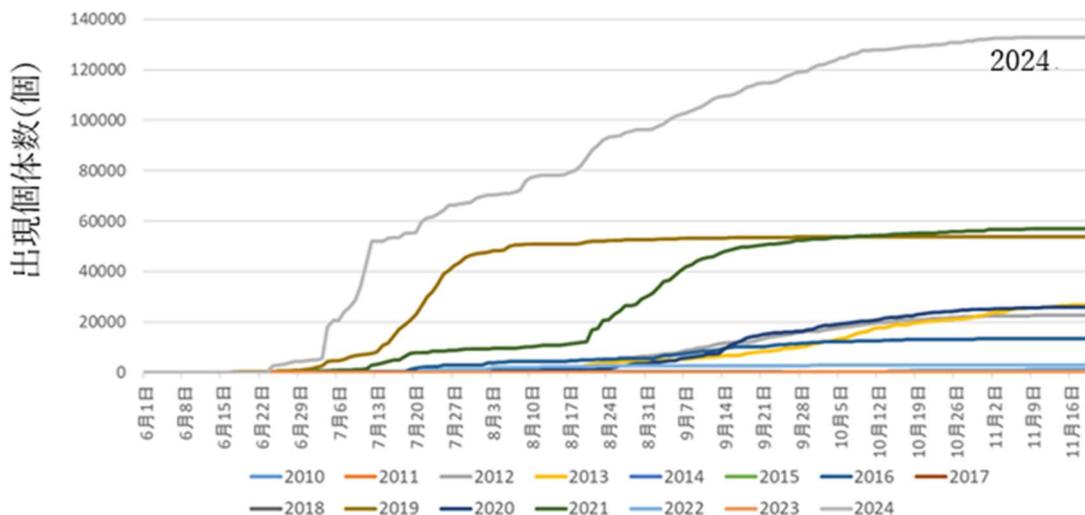


図 40. 2010～2024年の大型クラゲの累計出現個体数の年比較

図 41 は 2006 年以降の大型クラゲの日本国内での年別出現個体数である。2024 年は 2000 年代初めに比べれば少ないものの 2024 年は 2009 年以降最大の出現となり、各地に漁業被害をもたらした。

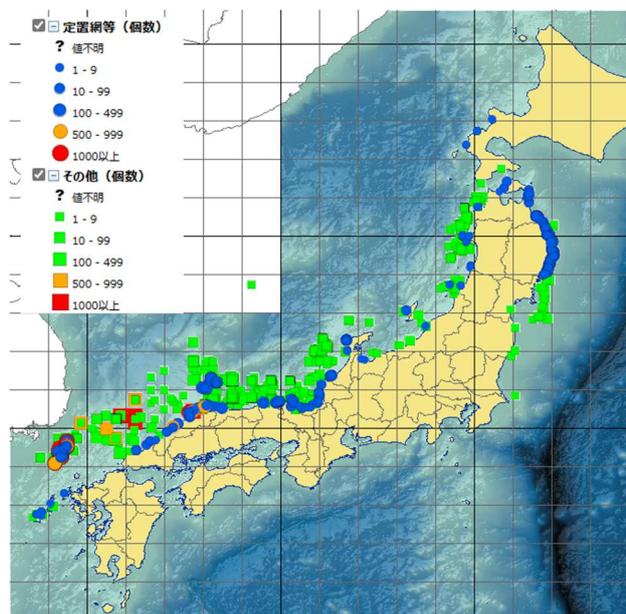


図 42. 2024 年の大型クラゲの出現位置マップ

2024 年の全ての出現情報をプロットしたマップを図 42 に示す。2024 年の特徴として、島根以北でまとまった出現が少なかったことが挙げられる。これは組織的な調査がスタートした 2006 年以降には見られなかった出現パターンである。

大型クラゲの大量発生メカニズムは依然として不明な点が多く予測が難しいため、出現状況に応じた機動的な調査(モニタリング)が重要である。常に一定の調査を実施することで、2024 年のような大量出現に迅速に対応することが可能となる。また、水産研究・教育機構では海洋数値モデルなどを活用して大型クラゲの回遊経路の推定などを行っているが、このモデルでもモニタリングによる情報が不可欠である。

(本トピックスの資料は水産庁の補助事業の成果によるもので、各県の水産試験研究機関、漁業者、大学などが長年に亘って収集蓄積したデータを使用しました。)

(システム企画部 斎藤克弥)

¹ <https://www.feednavigator.com/Article/2024/10/23/Peru-s-anchovy-quota-boost-sustainable-aquaculture-strategies/#:~:text=Peru%20has%20announced%20that%20the,1.682%20million%20tons%20in%202023.>

トピックス2 魚粉単価が落ち着く

生鮮マイワシの単価(円/kg)が 2022 年 10 月から 11 月に急騰し、2023 年 7 月にかけて低下したが、2023 年 12 月にピーク(113 円)を迎えた。その後、2024 年 7 月にかけて低下し、以降は落ち着いて推移してきた(図 43)。マイワシの仕向け先は、主に魚粉(フィッシュミール)や缶詰などの加工あるいは冷凍品の輸出である。そこで、日本の魚粉の輸入量と輸入金額から算出した魚粉の単価と生鮮マイワシの単価の推移を図 43 で比較した。これによると、生鮮マイワシの単価は輸入魚粉の単価から約 1 か月遅れで変動してきた。ここでは、生鮮マイワシや魚粉輸入単価の推移を検討した。なお、ここで用いた輸入金額は財務省の貿易統計によるもので、我が国通関地点における貨物価格(CIF: Cost, Insurance and Freight、貨物代金に加えて、仕向地までの運賃・保険料が含まれた価格)である。

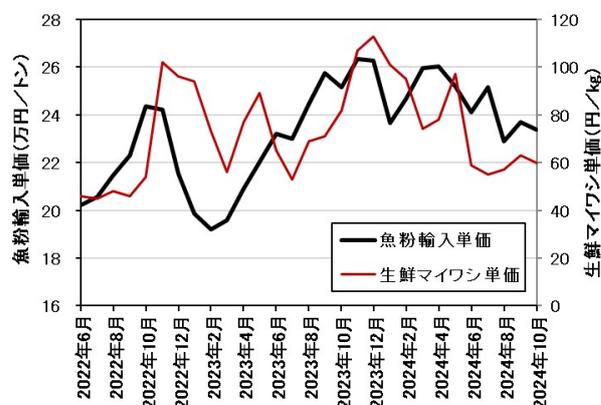


図 43. 2022 年 6 月～2024 年 10 月の日本の魚粉の輸入単価と生鮮マイワシの単価の推移 輸入単価は輸入金額と輸入量から算出(データ出典: <http://www.suisan.or.jp/html/topics.html>)

世界の魚粉の原料はペルーのアンチョベータ(カタクチイワシ)が平均的に約 20%を占めるが¹、その資源量や漁獲量は、エルニーニョ現象などに関連して大きく変動してきた²。そのため、アンチョベータの漁獲量変動は世界の魚粉価格にも大きく影響している(図 44)。最近では、2023 年の 4～8 月の禁漁を経て再開された。³、また、魚粉価格は約 20 年前から中国などの旺盛な需要を反映して高騰してきた。

² https://www.jstage.jst.go.jp/article/suisan/79/6/79_WA1966/_pdf/-char/ja

³ <https://www.jetro.go.jp/biznews/2023/10/86b5badb5c3566a0.html>

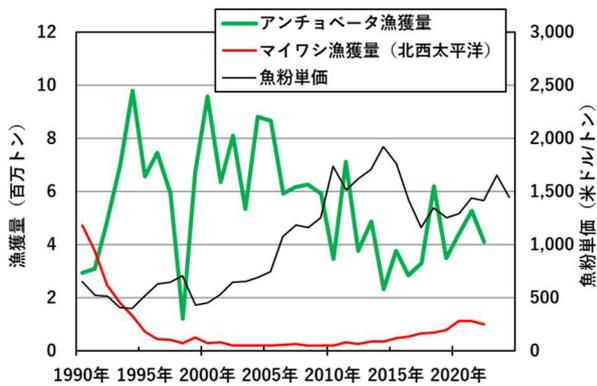


図 44. 1990～2024 年の魚粉の世界単価およびアンチョベータ(ペルー・カタクチイワシ)と日本マイワシの漁獲量(2022 年まで)の推移(魚粉単価出典: <https://fred.stlouisfed.org/series/PFISHUSDM/1000>、漁獲量出典: https://www.fao.org/fishery/statistics-query/en/capture/capture_quantity)

日本の魚粉の輸入単価を世界の魚粉単価と比較すると(図 45、日米の為替レートを考慮)、輸入単価が世界単価を 10%以上上回ったのは 2022 年 8 月～12 月と、2024 年 4～5 月、2024 年 7～10 月であった。この原因として、2022 年 8～12 月、2024 年 3～5 月に日本の魚粉入量と金額が増加したこと(図 46)に起因した可能性がある。しかし、2024 年 6 月以降に輸入量が減少したものの、2024 年 7 月以降の輸入価格は世界単価(円ベース)を上回って推移している。

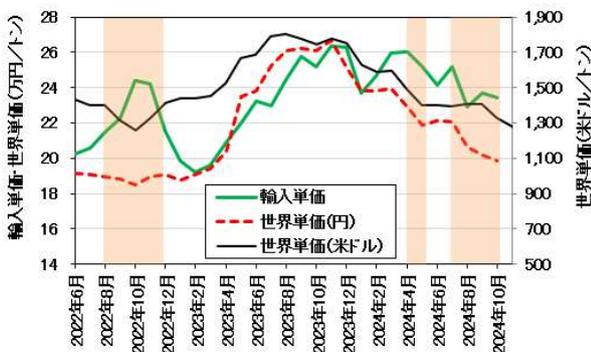


図 45. 2022 年 6 月～2024 年 10 月の日本の魚粉の輸入単価と世界の魚粉単価(米ドルベースと円ベース)(世界魚粉データ出典: <https://fred.stlouisfed.org/series/PFISHUSDM>)
輸入単価が世界単価を 10%以上上回った月をオレンジ色で示す。

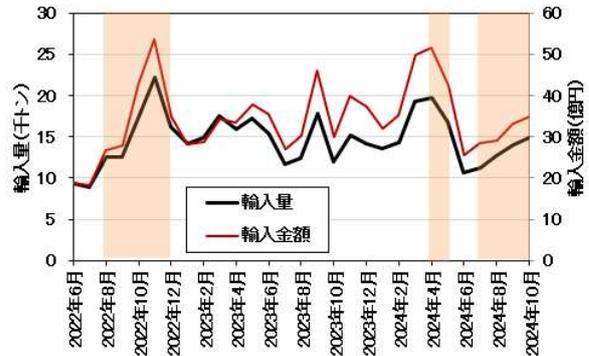


図 46. 2022 年 6 月～2024 年 10 月の日本の魚粉の輸入量と金額

(データ出典: <http://www.suisan.or.jp/html/topics.html>)
輸入単価が世界単価を 10%以上上回った月をオレンジ色で示す。

(水産情報部 谷津明彦)

トピックス3 2024 年の東シナ海におけるマサバの特異的な漁獲

さば類の全国主要港における本年の水揚量は 21.0 万トンで、不漁だった前年(21.2 万トン)に続き 2020 年以降で最低水準であった。一方、東シナ海・日本海側の本年の水揚量は 14.6 万トンと太平洋側(6.4 万トン)の 2 倍以上で、前年(12.6 万トン)を上回った。そこで、東シナ海・日本海側の主要漁業である遠洋旋網によるマサバの漁獲動向についてまとめた。

遠洋旋網の漁場は対馬、九州西沖、中南部の 3 海域に区分されるが、主体は対馬と九州西沖である。対馬海域におけるマサバの盛漁期は 1 月と 2 月であるが、2023 年は 12 月、2024 年は 11 月と 12 月に盛漁期並みに漁獲された(図 47)。また、2025 年 1 月もこの好漁が続いている。これとは対照的に、九州西沖海域の盛漁期は 10～11 月であるが、2024 年同期では低調であった(図 48)。

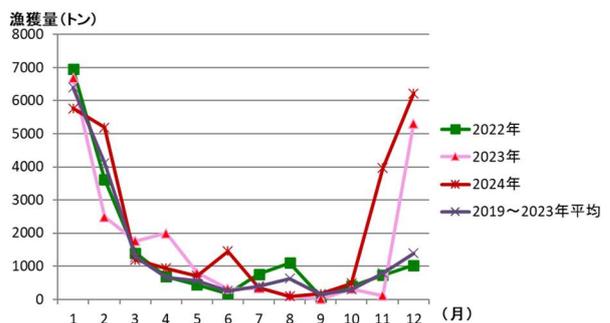


図 47. 2022～2024 年の対馬海域における遠洋旋網によるマサバ漁獲量の推移と 2019～2023 年平均漁獲量

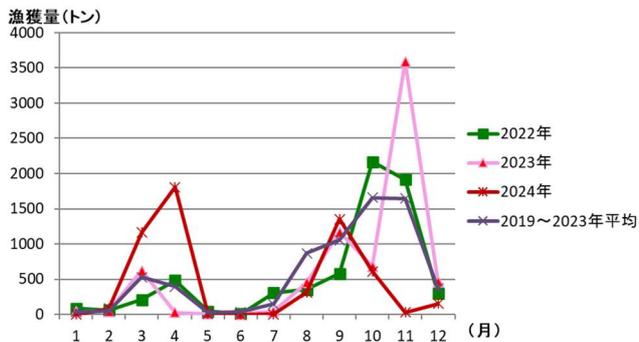


図 48. 2022～2024 年の九州西沖海域における遠洋旋網によるマサバ漁獲量の推移と 2019～2023 年平均漁獲量

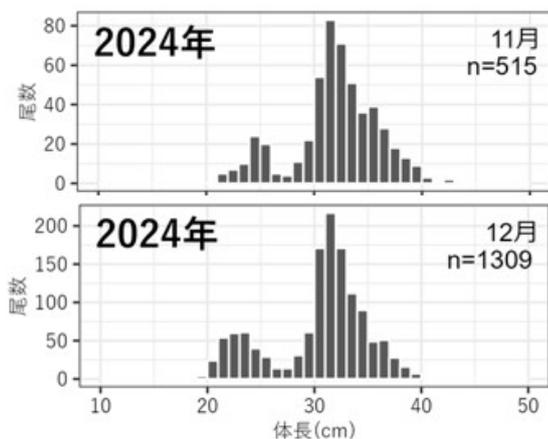


図 49. 2024 年 11 月と 12 月に松浦港に水揚げされたマサバ体長組成

2024 年の対馬海域における 11 月と 12 月の体長（尾叉長）組成は 30～34cm の 2 歳魚以上主体に 20～25cm の 0 歳魚が混じった（図 49）。これらの体長組成は例年と同様であり、2024 年、2023 年共に 30～34cm が主体である。なお、マサバ対馬暖流系群の成熟開始年齢は 1 歳（成熟割合 60%）、2 歳は 85% が成熟するとされるため、対馬海域でこの時期の主体となったのは、産卵のために南下した魚群と考えられる。また、対馬海域への南下経路としては、朝鮮半島東岸沖と山陰沖が想定されている⁴。

そこで、2023 年と 2024 年の 11 月と 12 月について、日本海西部周辺の海面水温分布を近年（2011 年～2020 年）と比較した。2024 年は日本海全域で平年より水温が高いものの 11 月は山陰西部沿岸で、

12 月は対馬海峡周辺で平年より低かった（図 50 下）。一方、2023 年 11 月と 12 月は朝鮮半島東岸で海面水温が平年より低かった（図 50 上）。

これらのことから、2023 年と 2024 年は対馬海域へ南下するマサバの回遊経路の水温が平年より低かったため、マサバ成魚の南下が早まったと考えられる。一方、気象庁⁵によると日本海南部や東シナ海北部の秋冬季の海面水温は 2023 年から上昇しており、マサバの産卵場への影響（北偏）が考えられる。そのため、両年において産卵群が対馬海峡周辺に多く来遊しやすい環境にあった可能性がある。他方、本年の九州西沖海域でのマサバの低調な漁獲が、この高水温の影響によるものか、対馬海域での好漁による漁場選択の影響かは現状では不明である。

水産研究・教育機構の海洋モデル³によると、今後も日本海側からの冷水の南下は進み、九州西沖海域の表面水温も前年より低くなると予測されており、マサバ対馬暖流系群の資源量も 2021 年以降増加傾向にある。今後の対馬・九州西沖海域のマサバ漁場と海洋環境の動向を注視したい。

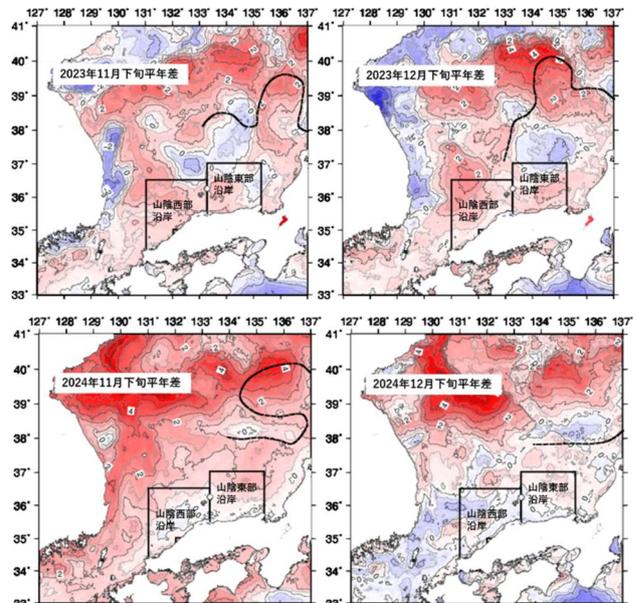


図 50. 2023 年(上)と 2024 年(下)における 11 月下旬と 12 月下旬の日本海西部周辺水温の近年（2011～2020 年）からの差

（水産情報部 源 浩輔・海洋事業部 矢野泰隆）

⁴ https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsfo/83/4/83_237/_pdf/-char/ja

⁵ https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyoo/series/wnpss_t_series1.html

³FRA-ROMS II - 改良版我が国周辺の海況予測システム -